跡見学園女子大学の新研究棟前庭
彫刻・RISING ・上昇（1994年）広井　力　作品

彫刻・RISING・上昇 ――コンピューター時代――

デンバーの大学で指導・研究をしていたときのことである。ある学生が今学期はコンピューターアートを取得するといった。その当時は、まだたいへん新しい分野であったが、私にはやや抵抗があったので、即座に、「人間もまたすばらしいコンピューターでしょう。あなたのコンピューターを機械のコンピューターにあずけてよいのですか」。などと皮肉を言ってしまったのである。しばらくすると、コンピューターによって打ちこまれた、たくさんのペーパーが持ちこまれてきた。一匹のハエをテーマにして、いろいろの図形が表現されている。ここにコンピューター時代とデザインの幕開けを見た。

現在の日本の自動車工業の主役は、工場の生産に導入された、エレクトロニクスを使ったロボットである。この人工頭脳を持ったロボットの作業の精密度は人間の技術よりも完全に、また昼夜を分かたず、ぐち一つこぼすことなく働いているのである。映画のモダンタイムズを製作した、チャールズ・チャップリンに、日本の産業用ロボットの活躍ぶりを見せたら、あの大きな目を輝かせて驚くに違いない。いや彼はあの時すでに、今日を予測していたのである。生前のチャップリンの家に招待されたことがある。レマン湖のほとりの彼の家はまっ白い家であった。緑の芝生で数人の人達と夕食をごちそうになった。彼は一時アメリカで吹きあれた赤がりの旋風をうけたことがあるので、このまっ白い家を親指でゆびさしして、「これは私のホワイト・ハウスです。」とひにくったのである。

チャップリンがピカソのアトリエを訪ねた話をしてくれた。ピカソが床から、これはセザンヌ、これはモジリアニと名画のほこりをはらう仕草をして、チャップリンに見せてくれた様をパントマイムで再現してくれた。さぞかし話がはずんだでしょう、と聞くと、彼はうかぬ顔をしてみせた。そして言うにはピカソはスペイン語とフランス語、チャップリンは英語であったのである。私の家内が、「入口にいらしたのは、お子さんですか。」と聞くと、「あれは門番の子供である、私の子供達は今バカンスでアフリカに行っている。」ということであった。この美しい国、スイスにいてのバカンスは、その正反対の原始の国アフリカ、とひどく感心したのであった。チャップリンが家内の持っていた格言集に英語で書いてくださったのは、「私は喜劇を愛する、なぜなら喜劇の底には悲劇があるからだ。」であった。

デザートは大きな皿に半球形に盛られた大きなシャーペット。「レマン湖の上には満月が、もう一つのシャーペットのように昇ってきた。」と私が言うと、そのときすでに全部頂いてしまったのと全く同じものがもう一皿運ばれてきたので一同大喜びであった。人間に必要なことは、深い人間性に支えられた調和である。彫刻は空間を調和して人間化する秩序の芸術と強く思うのである。

（広井　力（つとむ）・新研究棟前庭と彫刻の作者）